

景德鎮伝統製磁用具の記録資料に関する基礎的研究

王 麗

WANG Li

神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 博士後期課程
景德鎮陶磁大学専任講師

【要旨】 本論文では、景德鎮伝統製磁技術に関する記録資料を収集し、その分類、整理を行った。それを基に、景德鎮伝統製磁用具の名称を抽出した。まず、初めに、これまでの景德鎮伝統製磁用具に関する研究においては、記録資料の整理と研究が欠如していることを明らかにした。次に、中国、日本、欧米における景德鎮製磁用具を記録する資料の性格と内容を明示した。最後に、機械化時代以前の景德鎮製磁用具の実態と特徴を明確にした。

景德鎮製磁用具記録の情報を抽出する作業から、伝統製磁用具の文献記録は、まとまった記録として残されていないことが分かった。抽出した製磁用具の名称は、図像資料に記録された画像とあいまって、製磁用具の研究に優れた資料を提供するものといえよう。

日本における景德鎮磁器製造用具の記録は、主に中国の陶磁器に関する著作の和訳本と明治維新後の清朝調査報告書にある。前者は、中国の原本の訳本であるため、内容はほぼ原本に沿ったものである。一方、後者は、調査を基に書かれているため、道具に関するデータや情報が具体的である。民具調査の性格をもつといえるだろう。

管見する限り、最も古く体系的に景德鎮製磁用具を記録した文字資料は、中国の書物ではない。フランスのダントルコールが記した『中国陶磁見聞録』である。技術を記録するために、用具の名称を記録したものである。ただし、これは、製磁用具に焦点を当てたものではない。一方、日本の調査者には、製磁用具を調査対象にするという意識が存在した。残された製磁用具の記録は詳細で、研究の価値は高い。

今後の研究課題として、抽出された製磁用具記録の利用方法や、現在残されている道具を含めた、景德鎮伝統製磁用具の変遷を明確にすることが挙げられる。

The Basic Researches on Records of Jingdezhen Traditional Porcelain Making Tools

Abstract : This paper draws the following conclusions after collecting, classifying, sorting out and analyzing the records of Jingdezhen porcelain making tools.

As of now, the researches on Jingdezhen traditional porcelain making tools are mainly centered on kiln furniture. Other porcelain tools, with insufficient data collected, have not been paid due attention.

The paper finds out in literature records, the descriptions of traditional porcelain making tools are fragmental and scattered. However, these textual records, if combined with related images, could be good research materials.

The records of Jingdezhen porcelain making tools in Japan are mainly distributed in the Japanese translations of Chinese documents on porcelains and investigation reports conducted in Qing Dynasty after the Mingzhi Restoration. The former content are basically in a similar state in China, while the latter, with certain nature of public opinion polls, are more specific in terms of data and information.

The amount of data recorded by Europeans and Americans is small for now.

This paper is a superficial attempt to clarify the reality of Jingdezhen porcelain making tools before the Mechanization Era through defining the nature and content of the records, followed with classifying and studying the information of Jingdezhen porcelain making tools in China and Japan.

はじめに

中国における磁器生産の歴史は長い。その中心地である江西省景德鎮では、良質の磁器が生産されている。世界から、その生産技術が認められていた時代がある。本論文では、まず、その生産技術および製磁用具に関する先行研究の整理を行った。次に中国、日本、欧米における、景德鎮磁器の生産工程の記録資料から、その情報と研究成果をまとめた。これは、景德鎮製磁用具に焦点を当てた基礎研究である。

I 先行研究

(1) 景德鎮における製磁技術

従来、伝統的な景德鎮磁器生産技術に関する研究は、主として窯に関する技術を対象としていた。その窯の技術を支える生産用具についても、盛んに研究がなされている⁽¹⁾。しかし窯用具以外の用具については、日常的な性質をもっているため、中国での研究は少ない。

主な研究としては、次のようなものがある。

李家治（1998）は科学技術史の視点から、独自の発展を遂げた中国磁器生産技術を科学的に分析し、その研究史と全体像を明らかにした。第10章と第11章では、景德鎮磁器の生産技術に注目し、製磁道具について言及している。

趙宏（1999：39-43）の研究には「清唐英《陶冶图说》中的工艺观」（和訳：『陶冶図説』の技術思想）がある。『陶冶圖説』製磁技術の記録の内容と性質に注目したものである。製磁道具については『陶冶圖説』から「桶、卓、羊毛筆、竹筒、器匣」という名称を引用している。

宮木慧子（2006）には『日本における陶磁器用わら包装の造型的特質』という研究がある。その第3章には、景德鎮の荷造り工程についての調査が述べられている。「俵」「桶」「木箱」「瓷蔑（べつ）」という名称が記載されている。

李艶、宮崎清（2010：37-46）の研究は「景德鎮地域における伝統的磁器手づくり工房の様態——景德鎮伝統的磁器産業の中核としての手づくり工房の諸相」に記されている。製磁工房を中心に、その歴史、技術、組織、磁器の輸出などが紹介されている。製磁工房を支える工具業に関しては、「模

型行」「坯刀行」「筆行」「車盤店」「炭行」の名称だけが載せられている。用具と直接に関係する内容は少ない。

余佩瑾は「清乾隆《陶冶圖冊》的繪製背景與創作意圖」（和訳：清乾隆『陶冶図冊』の绘制背景と創作意図）（2010：14-23）と論文「《陶冶圖冊》所見乾隆皇帝的理想官窯」（和訳：『陶冶図冊』からみる乾隆皇帝の官窯像）（2013：185-219）の中で、乾隆皇帝と『陶冶図冊』のつながりを論じた。『陶冶図冊』の図像の内容を検討する際に、『陶冶図説』中の用具である「白碓、鍋、盆、匣鉢、輪車、筆、缸、竹筒」に言及している。

景德鎮陶磁大学古陶磁器研究所グループ（李、呉、張、呉：2012：104-107）は「『陶冶図説』制瓷技術理論化的特点及价值」（和訳：磁器生産技術の理論化の視点からみる『陶冶図説』の特徴および価値）という論文の中で、『陶冶図説』の技術に関する内容の特徴と価値について述べている。生産工程を分析する際に、『陶冶図説』から「水碓、臼、毛筆、缸、竹筒、車、竹棒、手套」などの名称を引用している。

以上の先行研究は、景德鎮製磁産業に関する用具について言及しているが、用具そのものを対象としたものではない。

日本において、景德鎮製磁産業の用具自体を扱った研究には、以下のものがある。

吉田光邦（1970：570-579）は、景德鎮磁器生産工程の図像資料の内容に基づき、生産用具の水車と轆轤を分析した。ヨーロッパへ輸出された生産用具にまで、考察が及んでいる。

町田吉隆（1993：15-20）は『天工開物』を基に、窯業の胎土精製を考察した。瓦と陶磁器生産の技術との共通点や相違を探り、胎土を作る用具や、石積みの碾（うす）、水車にも分析が及んでいる。ただし、その主な分析の対象は、磁器生産ではなく、瓦の生産技術である。さらに、陶磁器の胎土を作る用具も論じている。

本論文はこれまでの研究を踏まえ、中国、日本における景德鎮製磁用具に関する資料の収集、整理を行い、次の4点について明らかにしていく。

- ① 機械化以前における景德鎮製磁用具の記録資料の存在
- ② 製磁用具の記録の特徴の明確化
- ③ 現代における景德鎮伝統製磁技術の復原に関わる製磁用具についての資料の提供

II 中国における景德鎮製磁用具に関する記録資料

まず、中国における景德鎮製磁用具に関する記録資料を、表1のようにまとめた。

表1、資料番号1の『天工開物』の陶磁器生産工程の記録をみてみよう。

宋応星の著『天工開物』に、多くの挿図が含まれていることは、よく知られている。吉田はこの書について「古くは南宋の樓璣による『耕織図』の制作があった。それは宮廷の貴族あるいは官僚たちに、農事の辛苦を知らしめようとする勸戒の意を含んだものであった。これに対し『天工開物』は、単なる図解であり、各種の軽工業や農業のプロセスについて理解を容易にしようとするものであった」（吉田1970：570）と述べている。

『天工開物』には、当時における重要産業の各部門の生産過程が忠実に書かれている。

表1 景德鎮製磁用具に関する記録資料

資料番号	年 代	資料名	著者、所蔵者	図の点数
1	1637 (明崇禎 10 年)	『天工開物』	宋応星 著	13 点
2	雍正 ⁽²⁾	『陶冶図』	北京故宮博物館所蔵	8 点
3	1743 (清乾隆 8 年)	『陶冶図』	孫秭 周鯤 丁觀鵬 (絵) 唐英 (文) 台湾個人所蔵	20 点
4	1743 (清乾隆 8 年)	『陶冶図説』	唐英 著	なし
5	1774 (清乾隆 39 年)	『陶説』	朱琰 著	なし
6	清乾隆年代	『南窯筆記』	不詳	なし
7	1815 (清嘉慶 20 年)	『景德鎮陶録』(『陶成図』)	藍浦 著	14 点
8	1910 (清宣統 2 年)	『陶雅』	寂園叟 著	なし
9	1919	『飲流齋説瓷』	許之衡 著	なし

陶磁器生産工程の記録について、余佩瑾は以下のように評価している。

「在推廣和使知識普及的目的下，與景德鎮窯治相關的「白瓷」單元，其實只是其中一個举例說明的物證，故僅附於〈陶埏〉篇下，而無法大書特書」。

(筆者訳：天工開物編纂の目的は、中国の手作業の技術や知識の普及である。景德鎮窯とつながる「白磁」の項目に、その例は一つしかない。〈陶埏〉の内容の一部として扱われ、十分に記録することができていない)(余 2013: 191)

しかし、中巻の7の製陶の項目には、陶磁器製造工程関係の版画図が13枚記録されている。明の時代の磁器生産用具を記録する、唯一の図像資料である。清の康熙、雍正、乾隆の時代に認められた⁽⁴⁾参考書であり、研究価値があると考えられる。

『天工開物』の焼き物関係図像資料の題目は以下の通りである。

1「造瓦」、2「瓦坯脱桶」、3「泥造坯」、4「埴瓦済水轉⁽⁵⁾銹窯」、5「煤炭燒埴」、6「造瓮」、7「造缸」、8「過利、造瓷園器杯盤」、9「瓶窯連接缸窯」、10「瓷器汝水」、11「瓷器過⁽⁶⁾銹」、12「打圈画回青」、13「瓷器窯」

(和訳：1「瓦をつくる」、2「瓦の素地を桶からはずす」、3「土で埴の素地をつくる」、4「水によって転漉する」、5「石炭で埴を焼く」、6「ポットをつくる」、7「缸「かめ」をつくる」、8「ろくろで磁器をつくる」、9「登りがま」、10「磁器を水ですすぐ」、11「釉をかける」、12「絵付け」、13「磁器を焼くかま」)(藪内 2004: 147-159)

13枚の木版画で景德鎮磁器製造工程に関係するのは8「ろくろで磁器をつくる」、9「登りがま」、10「磁器を水ですすぐ」、11「釉をかける」、12「絵付け」、13「磁器を焼くかま」、の6枚である。1「瓦をつくる」と3「土で埴の素地をつくる」は、瓦と埴の製造工程図像である。磁器の素地の製造工程と似ているため、使う用具も似ていることがある。磁器の生産用具の資料として、研究価値がある。磁器製造工程の図像資料は、合計8枚になる。

その8枚には、削り仕上げ、施釉、絵付け、本焼きの工程が描かれている。しかし採石、土こね、ツヤをつくるなどの生産工程は略されている。図1は「石炭で埴を焼く」と「ポットをつくる」の図である。

『天工開物』の8枚の図像や説明の中に、製磁用具の「鉄線弦弓、白春、缸、砖、陶車、利刀、乳

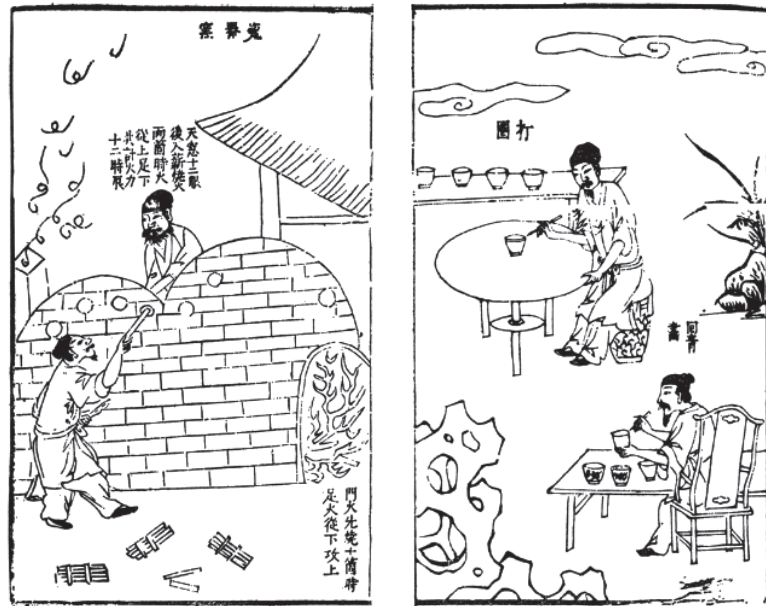


図1 『天工開物』の焼き物生産工程図の一部

鉢、匣鉢、鉄叉」がある。その9種類は、全て加工用具である。

資料番号2の『陶冶図』は、北京故宮博物館に所蔵されており、8枚の図像がある。資料番号3の『陶冶図』と相似している部分がある（宗 2018：237）。ただし、これに関する研究は少ない。

資料番号3の『陶冶図』は、乾隆皇帝の命令によって作成された、磁器生産工程の絵である。資料番号4『陶冶図説』は資料番号3の解説書である。『陶冶図』の中には、20枚の図像資料がある。

20枚の図で、全ての生産工程を表しているわけではない。代表的な生産工程を選び、描かれた図像である。現代的な製造工程の概念と、プロセスの分別意識が存在する⁽⁷⁾。

『陶冶図説』には、その20枚の磁器製造工程の題目が記されている。1「採石製泥」、2「淘練泥土」、3「煉灰配釉」、4「製造匣鉢」、5「圓器修模」、6「圓器拉坯」、7「琢器作坯」、8「採取青料」、9「揀選青料」、10「印坯乳料」、11「圓器青花」、12「製畫琢器」、13「蘸釉吹釉」、14「鏟坯空足」、15「成坯入窯」、16「焼坯開窯」、17「圓琢洋彩」、18「明爐暗爐」、19「束草装桶」、20「祀神酬願」である。

1「採石製泥」と2「淘練泥土」は、現代的な原料採取、および陶土をつくる工程である。5「圓器修模」、6「圓器拉坯」、7「琢器作坯」は成型工程である。轆轤で成形する。この工程では、景德鎮特有の圓器と琢器の概念が使われる。8「採取青料」と9「揀選青料」は染付の呉須をつくる工程である。10「印坯乳料」、11「圓器青花」と12「製畫琢器」は生地加飾、下絵付けである。3「煉灰配釉」は釉薬をつくり、13「蘸釉吹釉」は釉薬をかける。14「鏟坯空足」は削り仕上げ、19「束草装桶」はわらで荷造りし、桶で運送する作業である。16「焼坯開窯」は本焼成である。17「圓琢洋采」と18「明爐暗爐」は上絵工程を指す。

1枚ごとに説明が付いている。以下、説明の中にある、生産用具の名称を抽出する。

1「採石製泥」には生産用具の「輪、碓、舂」がある。2「淘練泥土」には「水缸、木鈿、馬尾細籬、雙層絹袋、匣鉢、無底木匣、新罇、細布大単、大石片、鉄鋏」がある。3「煉灰配釉」には「曲木、鉄鍋、缸、盆」がある。4「製造匣鉢」には「匣鉢、輪車」がある。5「圓器修模」には「模、

範」の名称がある。6「圓器拉坯」には「輪車、機軸、車架、車盤、竹杖」がある。7「琢器作坯」には「刀、大羊毫筆、布、平板、刀、模」がある。8「採取青料」と9「揀選青料」には生産用具に関する記録はない。10「印坯乳料」には「研鉢、矮凳、直木、板、搥」がある。11「圓器青花」と12「製画琢器」には生産用具に関する記録はない。13「蘸釉吹釉」には「羊毛筆、缸、竹筒、細紗」がある。14「旋坯空足」には「鏟車、木椿、丝绵」がある。15「成坯入窯」には「瓦、匣」がある。16「焼坯開窯」には「布、手袋 湿布」がある。17「圓琢洋彩」には「筆、刷」がある。18「明爐暗爐」には「爐鉄輪、鉄叉、鉄、蓋板、圓板」がある。19「束草装桶」には「紙、桶、草、莢草、竹」がある。⁽⁸⁾20「祀神酬願」には生産用具に関する記録はない。

『陶冶図』はヨーロッパにも影響を与えた。その時代に、ヨーロッパに輸出した磁器の生産工程の絵の手本になった。ヨーロッパは中国磁器の美しさに魅せられて、大量の製品を輸入した。同時に、その生産技術を習得し、良質の磁器を生産しようという意欲も強かった。彼らは、景德鎮の生産技術を習得するため、中国人画家に陶磁工程を描かせ、本国に送らせたのである。その中で、最も熱心な国は、フランスであった。描かれた絵には、削り仕上げ、水挽き、本焼きなどの生産工程だけでなく、港での運送作業や外国人との交渉のシーンも描かれている。こうした多様な景德鎮の製陶工程図は、現在9種あることが知られている。

先行研究に基づき、輸出磁器生産工程図を表2のようにまとめた。

吉田光邦（1970：572-579）は、欧米研究者の先行研究に基づき、ルネ美術館所蔵の26枚の図とThe Book of Porcelain（W. A. Staehelin）に公表された34枚の図を取り上げ、そこに描かれた内容を紹介している。その中には、各工程の用具に関する言及もみられる。これは、景德鎮磁器生産用具に対する先行研究の1例である。

それらの絵の研究価値について、吉田は、唐英の陶冶図と比べると「この30図は多くの新技術的

表2 輸出磁器生産工程図

資料番号	所蔵者、出版者	所蔵番号	図の点数	備考
1	パリ国立文書館	Oe 104		
2	パリ国立文書館	Oe 105	26点	後記のルネ美術館のものと同じ。
3	パリ国立文書館	Oe 106	12点	
4	パリ国立文書館	Oe 107		
5	国立セーブル磁器工場	p. 326		1795年北京に入ったオランダ使節団に加わったド・ギネのもたらしたもの。
6	国立セーブル磁器工場	p. 327	22点	ヴァミオ神父（1718～95）のもたらしたもの。
7	ルネ美術館		26点	ド・ローバン（1731～99）その一族であるシュパリエ・ド・ローバン（1736～92）が広東で得たもの。
8	スウェーデンランド大学	No. 174	50点	1755年スウェーデンの東インド会社のもたらしたもの。
9	著作権がBenteli - Verlag, Bernに属す 英訳の著作権がPercyLundHumphries & Co Ltdに属す		34点	The Book of Porcelain（W. A. Staehelin）として公表されたもの。
10	Altenburg Schloss-und-Spielkarten 博物館		23点	1731～1746年

吉田（1970：571-579）と江（2008：99-109）を参考に筆者が作成。

側面を忠実に描写している。その意味でこの種の画卷は陶説類の文献とあいまって優れた資料を提供するものといえよう」(吉田 1970: 571) と述べている。

江滢河は『清代广州外銷画中的瓷器烧造图研究』(和訳: 清の時代広州磁器生産工程輸出絵の研究)(2008: 99-109) で、1755年スウェーデンの東インド会社がもたらしたスウェーデンランド大学所蔵の50枚の図の由来、工程内容について述べている。江はその関係者を考察し、図がもっている技術的価値、外国との磁器交流を示す歴史的価値を強調する。

図像の情報や内容についての、詳しい分析考証は別章に譲る。ここで指摘したいことは描かれた生産工程が、景德鎮の磁器生産工程だけではなく、中国の他の生産地の生産工程にも及んでいる点である。

描かれた生産工程は、次の3種類に分けられる。

①景德鎮の生産工程。広東の絵師にとっては、実際の仕事の状況を、みることができない。前述した『天工開物』『陶冶図』『陶成図』を手本にして、推し量るだけである。

②広東の生産工程。清の乾隆(1736-)から初めの100年間は、西洋向けの輸出磁器を生産するために、景德鎮で生産された白磁器を、広東へ輸送していた。そこで、工人を雇い、西洋画に使われる輸入顔料を用い、彩色していたのである。

③中国の他の陶磁器生産地の生産工程。吉田(1970: 579)は資料番号8を詳しく研究し、「この図はこれまで景德鎮を描いたものとして説明されてきたが、上の各図についてのノートから明らか⁽⁹⁾のように、作業の一部分は徳化のスケッチに基づいている。従ってこの図巻は景德鎮よりもむしろ徳化のそれを伝えるものというべきであろう」と指摘する。

広東の絵師は、以上の3種類の生産工程を合わせ、絵を描いたこともあった。広東の絵師が描いた絵は、本当に徳化の生産工程なのだろうか。あるいは景德鎮や広州、その他の地域である可能性もある。これらは、今後の課題であろう。

さらに注目したい点は、この種の絵の性格である。これらの絵は、記録するために描かれたものではなく、商品として販売するために描かれたものである。商品としての性格から、絵の内容や枚数などは、客のニーズや好みによって変化する。また、これらの絵には、いずれも『陶冶図説』のような説明も付いていない。

景德鎮製磁用具研究で、この種の絵の内容をどのように判断し、位置付けるかは、今後の課題となる。

資料番号5『陶説』は、中国清の朱琰が著した陶磁器書で、全6巻からなる。巻1の「説今」は、清初から乾隆時代に至る「饒州窯」と呼ばれた景德鎮窯の歴史と製品の記録である。巻1には資料番号4の「陶冶図説」の内容も収録されている。巻2の「説古」は、唐・五代・宋の越州窯、竜泉窯、定窯など、諸窯の説明となっている。巻3の「説明」には、明代の景德鎮窯の歴史と製品が記録されている。巻4、巻5、巻6は「説器」である。古代唐六朝時代までの古陶磁評論、唐～元代の古陶磁評論、明代の陶磁評論が書かれてある。

『陶説』には、生産技術と製品の記録が記載されている。ただし、製磁用具と関係する部分は巻1の「陶冶図説」だけで、他は言及されていない。

資料番号6の『南窯筆記』は清の乾隆年間における陶磁器の専門書である。著者は不詳であるが、

近年、著者は張九鉞であるという説が出ている（陳 2017：1-2）。著者がさまざまな書を読み、そこから得た意見・感想を集録したものである。景德鎮の繁栄期の生産状況を表している。雍正、乾隆の時代に、景德鎮窯は宋の定窯、龍泉、鈞窯の製品を複製していた。その際に使われた陶土、釉薬などが多く記録されている。

この書は 35 項目からなっている。以下のとおりである。

柴窯、汝窯、観窯、哥窯、定窯、龍泉窯、均窯、永樂窯、宣窯、成宏窯、正徳窯、嘉万窯、厂官窯、釉炉、彩色、黄緑、金銀、法藍、官窑、不子、高岭、合泥、釉、灰、配釉、坯胎、圓器、琢器、雕削、印器、鑲器、画作、匣钵、窑、料。「涉及景德镇仿制的古名窑 7 条、明代窑 6 条、记述景德镇瓷器制作的胎、釉、彩、窑等 21 条」（和訳：34 の項目のうち、景德鎮窯が、他の窯製品を複製していたことに関するものが 7 個、景德鎮の明代の窯に関するものが 6 個、景德製造技術に関するものが 21 個である）（陳 2017：1-2）。本書に関する研究は極めて少ない。管見の限り、前掲の（陳 2017：1-2）だけである。

この『南窯筆記』に記録されている景德鎮製磁用具は、次のようなものである。

「不子」の条には「春」、「釉」の条には「石春、水春」、「釉」の条には「盆」という用具が記載されている。「匣钵」の条には「鋼匣、鎮壇匣、皮壇匣、桶匣、碗盘匣、鼓儿匣」がある。このように匣钵を詳しく分類しているのは『南窯筆記』だけである。「窑」の条には「鉄鋏、坯片」がある。

資料番号 7 の『景德鎮陶録』は、清の嘉慶 20（1815）年に、景德鎮の学者である藍浦が著したものである。後に、門人の鄭廷桂が、増補し完成した。全 10 巻である。景德鎮窯の状況、製法、製品の種類が、図入りで解説されている。特に当時の御器廠官窯の組織やその製作過程が、詳しく述べられている。その他に、歴代の主な陶窯についての記述や、文献に記載されている陶磁器に関する文章が収録されている。併せて、陶器全般についての概観も述べられている。

陳寧は『清代陶磁文献学論綱』で、この書は「1 歴史学の価値；2 工芸学の価値；3 民俗学の価値；4、文献学の価値がある」（陳 2017：194-217）と指摘する。

江滢河は、次のように述べている。

「1815 年刻印的藍浦『景德鎮陶録』上收录有木刻画插图、这是郑琇根据唐说的内容、亲身观察所绘的『陶成图』、一共有 14 幅描绘了瓷器制作过程、包括：修模、洗料、斲坯、荡釉、满窑、取土、烧炉、练泥、做坯、印坯、开窑、镀匣画坯、器、这些图与『陶冶图』相比、构图要简单、经常是一幅画描绘两个以上的制作过程。这些图画自然没有宫廷绘画的皇家气息、体现的也不是歌舞升平的盛世景象。不过由于宫廷绘画不易为人所见、『景德鎮陶録』中的文字和图画、对于我们了解瓷器制作过程有着重要参考价值、可以看成是 18-19 世纪景德鎮瓷器制作过程的实录。」（江 2008：101）

（和訳：1815 年に印刷された『景德鎮陶録』の木版画イラストは、唐英の説明に基づき、鄭琇が自身の観察で描いた『陶成図』である。合計 14 枚の絵画からなり、磁器をつくる過程が描写されている。描写されている工程は、陶石の採掘、土練り、さや造り、コバルト青料の精製、水挽き、型押し、削りあげる、下絵付け、くすりかけ、窯詰め、窯出し、上絵付け、上絵窯などである。『陶冶図』に比べると、景德鎮陶録の構図は単純で、その多くは、二つ以上の制作工程を描いている。当然のことながら、宮廷絵画の雰囲気もなく、素朴な絵となっている。磁器の製造過程を理解するための重要な参考書である『景德鎮陶録』は 18～19 世紀の景德鎮磁器の製造工程の記録とみなすことができ

る。)

『景德鎮陶録』の巻1には、鄭琇蘊山の描いた16枚の図がある。景德鎮の地図1枚、御窯の図1枚、磁器生産工程図14枚からなる。『陶冶図説』を参考としたとする説明文が付いている。

『陶成図』と称されるその生産工程図について、吉田は「14図あるがいずれもあまり正確な描写ではなく、生産工程を記すには十分なものではない。しかし最も広く知られており、現在景德鎮の製陶の実状を知る好史料とされている」(吉田1970:571)とする。

「正確な描写ではなく、生産工程を記すには十分なものではない」と指摘しながら「好史料」とであると評価する。

そこで、吉田の論文を詳しくみてみよう。吉田の論点は次の4点である。

- ① 素朴な木版画なので、細かいところまで描写できず、正確な描写ではないと判断した。
- ② 宮廷の指示によってつくられた資料番号3の「陶冶図」と比べると、同じレベルではないので「不十分」と感じた。
- ③ 実際の磁器生産工程と比べると「不十分」と考えた。
- ④ 「陶成図」のように、分かりやすく、広く流布され、民間にも海外にも大きな影響を与えた磁器生産図像資料はないので「好史料」と評価した。

「陶冶図」との比較について、太田能登は次のように述べている。

『景德鎮陶録』に載せてある製造法、唐英の記事、否な寧ろ朱琰の記事に據ったのであるが、陶説のものとは文句は餘程異なって居る、而して唐英の書いた全文は浮梁県誌に載って居るが謂わゆる陶冶図説二十枚は陶説にも景德鎮陶録にもものらない。尤も陶録には十五枚の図があれど、是れは鄭蘊山の描いたもので別である。畢竟陶冶図二十枚は民間に傳っておりませぬ」(太田1938:2)。

つまり、陶冶図20枚は質の高い図像資料であるが、朝廷のものであるため、一般に民間ではみることができない。それに比べると『陶成図』は素朴であるが、広く民間に流布されていたため、18～19世紀の景德鎮磁器の製造工程の記録としては、良い史料といえる。

以下は『景德鎮陶録』の生産工程記録に基づき、製磁用具の名称を抽出したものである。

1「取土」の工程には生産用具の「水碓」、2「練泥」の工程には「水缸、木鈹、馬尾細籬、雙層絹袋、匣鉢、無底木匣、新罇、細布大単、大石片、鉄鋏、曲木、小鉄鍋、缸、盆」の記録がある。3「鍍匣」の工程には「匣鉢、輪車」、4「修模」の工程には「模子」、5「洗料」の工程には「小黄土匣」の記録がそれぞれ記載されている。それらの説明文の中に「幅中撿洗之事特詳」(和訳:ここで説明した洗料の生産工程は、絵のなかに詳しく描かれている)との注がなされている。6「做坯」の工程には「輪車、機局、小竹竿、布」、7「印坯」の工程には「模子、小輪車、矮凳、鉢、直木、瓷槌」、8「宣坯」の工程には「輪車、木椿、頂鐘、絲棉刀、」がある。9「畫坯」の工程に、生産用具に関する記録はない。10「蕩渤」の工程には「毛筆、缸」、11「滿窯」の工程には「坯匣」の記録がある。12「開窯」の工程には「瓷匣、布、手袋 湿布」がある。13「彩器」の工程には「筆」、14「燒爐」の工程には「鐵輪、鐵叉、蓋板、圓板」がある。

『陶冶図説』に記録されている19「束草装桶」工程の用具「紙、桶、草、莢草、竹」は、ここに記録されていない。

その他、巻4には「礶春、錐、杵臼、試火照、方木匣、大籃」がある。

巻2、巻3、巻5、巻6、巻7、巻8、巻9、巻10に、景德鎮の用具に関する記録はない。

資料番号8の『陶雅』は、清の時代の文人、寂園叟が記した陶磁器筆記である。ここに、景德鎮の製磁道具の記録はない。

資料番号9の『飲流齋説瓷』は、清代以後における古陶瓷専論の一つである。作者は許之衡で、10項目からなる。1「概説」、2「概窯」、3「説胎釉」、4「説彩色」、5「説花繪」、6「説欸識」、7「説瓶罐」、8「説杯盤」、9「説雜具」、10「説疵偽」である。『飲流齋説瓷』に記録された景德鎮製磁用具を以下のように抽出した。

3「説胎釉」の条には「缸、竹为筒、釘、轆轤、筆、」という生産用具がある。5「説花繪」の条には「刀、針、版、錐」がある。この中の「錐」は、他の資料には記録されていない用具である。

以上、中国における景德鎮製磁用具記録の情報を抽出する作業から、その資料の特徴を次の3点にまとめた。

- ① 陶磁器に関する文献は多いが、道具に関する記録は少ない。また、まとまったものはなく、体系的に欠ける。
- ② 道具の名称だけが記されている文献も多い。意識的に、道具を説明している記録は少ない。
- ③ 磁器生産工程に関する図像資料には、道具を記録したものが比較的、多く存在する。景德鎮伝統製磁用具研究にとって、価値ある資料となっている。

Ⅲ 日本における景德鎮製磁用具の記録資料について

日本における景德鎮磁器生産技術、および用具に対する研究には二つの方法があった。一つは、主に中国の書物を翻訳することを目的とするものである。もう一つは、直接に景德鎮へ行き、調査を行うという方法である。その結果、日本には2種類の記録資料が残された。一つは、中国の製磁技術に関する書物の和訳である(表3)。もう一つは明治以降の調査報告書である(表4)。

まず、景德鎮製磁用具を記録した和訳本を分析してみたい。

(1) 景德鎮製磁用具に関する書物の和訳本について

資料番号1、2、3は『天工開物』の和訳本である。文献学や科学技術交流史にとっては、非常に価値のあるものである。ただし、景德鎮製磁技術の専門書として訳されたものではないため、ここでの説明は省略する。

資料番号4、5、6、7はいずれも「陶説」を翻訳し、注釈を付けた和訳本である。葛西因是、青木木米、三浦竹泉らが、和漢対照で翻訳したことがある。また、塩田力藏が対訳し、新註を付けたこともある。1835(天保6)年に、青木木米が翻訳した『陶説』は、日本の国内でよく知られている。それは、日本で広く流布し、大きな影響を与えた。その内容については、拙稿「日本における『陶説』の影響と流布」(王2016:9-10)で紹介した。

資料番号の8、9、10は「景德鎮陶録」を翻訳し、注釈を付けた和訳本である。

『景德鎮陶録』の図は、景德鎮磁器生産道具を直接に記録する資料である。以下は日本で印刷された『景德鎮陶録』の印刷本、および和訳本の図像資料のテキストについて検討を進める。

表3 景德鎮製磁用具に関する書物の和訳書（筆者作成）

資料番号	年代	資料名	著者、訳者および出版者	図像	その他
1	1771	『天工開物』3巻	宋應星 原著 江田益英 校訂	あり	刊記に「明和八年卯年二月書林 江戸通本石町十軒店山崎金兵衛 大坂心齋橋筋北久寶寺町通 柏原屋佐兵衛 同 河内屋茂八」とある。
2	1943	『天工開物』	宋應星 原著 三枝博音 解説 十一組出版部	なし	明和8年菅生堂板行の複製本 附録：「天工開物」の研究
3	1994	『天工開物』	宋應星 原著 藪内清 訳注 東洋文庫 130 平凡社	なし	図版は崇禎本である。
4	1807	『陶説』巻1-2	朱琰 著 葛西因是 訳読	なし	
5	1903	『陶説』巻1-6	朱琰 著 三浦竹泉 訳	なし	
6	1941	『對譯新註支那陶説』	朱琰 原著 塩田力藏 譯解 アルス	なし	
7	1981	『陶説注解』	朱琰 原著 尾崎洵盛 注解	なし	
8	1907	『和漢對照景德鎮陶録』 細川開益堂	藍浦 著 鄭廷桂 補輯 藤江永孝 譯 雄山閣	あり	
9	1980	『景德鎮陶録』	浦浜南原 著 鄭廷桂 補集 永竹威、片山一 共訳 五月書房	あり	
10	1987	『和漢對照景德鎮陶録 一名 續陶説』	藍浦原 著 愛宕松男 訳注 東洋文庫 (464-465)	あり	
11	1938	『陶説陶治図説証解』	唐英 原著 太田能登 譯解 大日本窯業協会	『支那製磁 十四図』	佛人ジュリアン著の『支那製 磁書』より転載
12	1939	『支那陶器精鑑：旬雅新 註』	寂園叟 原著 塩田力藏 譯解 雄山閣	なし	
13	1944	『説瓷新註支那陶磁』	許之衡 原著 塩田力藏 譯解 第一書房	なし	

資料番号8は、藤江永孝訳註の和訳本である。明治40年に京都細川開益堂から『和漢對照景德鎮陶録』として刊行された。別名は「続陶説」である。題目には「雄作題於東京博物館」という項目がある。そこには自序と、第三者が記した二つの序文がある。自序には「大清同治九年歲次庚午小春月朔……愚弟王廷鑑拜撰」と記されている。もう一つの序文には「明治卅八年一月八日に稀寿鉄瘦外史」という署名がある。

その体裁は直訳であり、原漢文は記載されていない。著者と訳者が「清昌南藍浦浜南氏原著、門人鄭廷桂問谷梢榭・京都陶磁器試駒場長江永考訳述」のように並べて記されている。巻頭には三浦竹泉の労訳を称えた、富岡鉄斎の序文が配されている。その評価について、愛宕松雄は「不斉合については、夙に鉄斎の序文に拠るべしというのが定説になっているからそれに従って竹泉訳と称するが、それにしても体裁の欠陥は覆うべくもない。それのみではない……欄外に付注するといっても寥々として、肝腎の訳文に晦渋・誤謬が少なくない実状だからこの竹泉訳の『景德鎮陶録』は改訂を加えない限



図2 表3の資料番号8「和漢對照景德鎮陶錄」の陶成図の一部

り大した役に立たないであろう」(愛宕 1987:7) と述べている。

資料番号9は永竹威・片山一の共訳本(1980)である。この本について、愛宕は「注を全く欠いているのが瑕瑾である。何となれば、藍浦の記述そのものにすでに可成りの不正確・誤謬が含まれているのであるから、これを匡さないまま、その本文を何に正しく訳出しても詮がないからである。巻末に付録された概説、解題には雑処に一家言が示されていて、この点は見逃がすことができないであろう」(愛宕 1987:8) と評価する。

資料10は愛宕松男が1987年に訳注した単行本である。詳細な注解を加えた完全訳本で、注釈も充実している。

この三つの資料の中で、原テキストについて言及しているのは、資料番号10である。訳者によると、その原テキストは「光緒辛卯(十七年)夏重鋟」と題される書業堂蔵版である。資料番号8と資料番号9は、原テキストが不明である。そのため、図像資料が載っているものの、その由来が不明である。ただし、いずれの資料も、同様の内容になっているため、その図像は資料番号9と同じく「光緒辛卯(十七年)夏重鋟」書業堂蔵版の複写の可能性が高い。

資料番号11の『陶説陶冶図説証解』は、唐英が著した陶冶圖説二十則についての解説である。元々は太田能登が、大日本窯業協會雑誌に9回にわたり掲載したものである。それに訂正を加え、口絵、付録を載せて出版した単行本である。

太田は「陶説の邦訳は和訳書の性格無きにあらねど、いずれも靴を隔、痒きを搔くが如き感じがあることを免れない」(太田 1938:2) と述べている。それを補強するため『陶説陶冶図説証解』で陶冶図説二十則を細かく解説している。口絵としては、フランス人ジュリアン著の『支那製磁書』から転載した「支那製磁十四図」を載せている。「支那製磁十四図」を口絵として選んだ理由について、太田は「陶冶圖説二十枚は、陶説にも、景德鎮陶録に載ってない、尤も陶録一は、十五枚の圖があれど、是れは鄭蘊山の描いたもので、別である、畢竟陶冶圖二十枚は、民間に傳つて居り未せぬ」(太田 1938:2) と述べている。太田は、資料である乾隆8(1743)年の陶冶図20枚の資料の入手が困難で、使用できなかった。鄭蘊山の描いた15枚の図は、陶冶図とは異なると認識していた。さら

に、ジュリアン著の『支那製磁書』の価値も認めている。

資料番号 12 と資料番号 13 は、塩田力藏によって注解された、陶磁器の専門書である。しかし、その内容は鑑賞が中心であるため、ここでは扱わない。

これらの資料を検討すると、製磁生産用具に関する記録は、中国原本と同じく、まとまった記録であるとはいえない。訳者は、用具の名称を、原本そのままの名称で使用している。その上で、注を付けて説明し、翻訳しているものが多い。日本の研究者たちは、注の中で、景德鎮製磁技術や道具への見解を多く示している。それは、別章に譲る。

(2) 明治以降における景德鎮への調査について

明治期に、景德鎮へ直接、調査に行った人たちがいた。殖産興業による産業の育成を図ることを目的としていた。さまざまな分野の産業に着目し、優秀な人材を派遣し、海外調査を行っている。そうして残された報告書は、当時の景德鎮磁器産業を記録する資料として研究価値の高いものである。

その報告書を、表 4 にまとめた。

資料番号 1 の調査者は、市陶磁器試験所長であった藤江永孝である。陶磁器技術者として農商務省商工局の依頼を受け、11 月 23～30 日の 7 日間にわたり、景德鎮窯業を調査した。報告の内容は第 1 章「位置」第 2 章「営業の組織及び規模」第 3 章「職工賃銭及び休業」第 4 章「原料及び薪材」第 5

表 4 景德鎮での調査報告書

資料番号	調査年	題目	著者	図像	
1	明治 31 (1898) 年 ⁽¹⁰⁾	清国景德鎮磁器視察報告	藤江永孝	3 枚	
2	明治 31 (1898) 年 ⁽¹¹⁾	清国陶磁器産地視察報告	加藤助三郎	なし	*
3	明治 31 (1898) 年 ⁽¹²⁾	清国陶磁視察追加報告	加藤助三郎	なし	*
4	明治 31 (1898) 年 ⁽¹³⁾	清国窯業視察談	加藤助三郎	なし	*
5	明治 34 (1901) 年 ⁽¹⁴⁾	清国窯業視察復命書	黒田政憲	なし	
6	明治 39 (1906) 年 ⁽¹⁵⁾	清国陶磁器業視察報告	日比野新七	なし	*
7	明治 39 (1906) 年 ⁽¹⁶⁾	清国ニ於ケル陶磁器業	日比野新七	なし	*
8	明治 39 (1906) 年 ⁽¹⁷⁾	清国上海陶磁器業練習調査報告	石黒秀久	なし	*
9	明治 40 (1907) 年 ⁽¹⁸⁾	清国景德鎮ニ於ケル製陶業	石黒秀久	なし	
10	明治 41 (1908) 年 ⁽¹⁹⁾	清国窯業調査報告書	北村弥一郎	71 枚 (中には写真 2 枚)	

郭 (2014 : 87) に筆者が加筆し、作成。*は筆者が追加した資料である。

第貳圖



図 3 表 4 の資料番号 1 に記録された模型

章「制杯及び製造雑記」第 6 章「窯及び窯詰め」第 7 章「染附及び彩画」からなる。第 2 章「営業の組織及び規模」の中に、製磁用具である「轆轤」がある。第 5 章「制杯及び製造雑記」の中には「水簸、手轆轤、廻し棒、織糸、板、模型 (図 3)」が記録されている。手轆轤と廻し棒について、藤江は「轆轤は何れも手轆轤にして其旋盤直径三尺五寸乃至四尺 内外を有し一見甚だ大なり故に之を回旋するに所謂廻し棒を用る兩手に據り

て爲す一旦全速力を以て之を回旋し 置くときは其惰力により容易に休止せず之を本邦在來の手轆轤若くは蹴轆轤に比しての利害得失は宜く熟考を要すべきの材料たるを信す」(藤江 1898:115) と述べている。

資料番号 2、3、4 の報告者は「陶器將軍」と呼ばれる実業家、加藤助三郎である。岐阜県陶器業組合長である。資料番号 1 の報告者、藤江永孝と同じ調査グループである。資料番号 2、3 は景德鎮の概況と途上の状況が述べられている。だが、景德鎮以外の陶磁器産地を中心としており、技術的な内容も少ない。資料番号 4 は、『景德鎮製磁現況』と名付けられている。技術や職人などに関する内容を分類せず、一括して記録する。景德鎮の商業や風景を観察した内容が多く、用具の記録はみられない。

資料番号 5 の報告者は、瀬戸陶器学校長であった黒田政憲である。明治 34 (1901) 年、上海、九江、景德鎮、漢口の磁器業状況を調査している。3 月 25~30 日までの 5 日間、景德鎮に滞在した。景德鎮磁器業に関する報告内容は次のようなものである。

「概況」、「窯の構造窯築造用料及び築窯価格窯数」、「原料及び素地釉薬の調合」、「職業に関する一般的状況」、「工場組織及び製作法」、「製品販売法並びに磁器商店」、「荷作り及び運搬」である。その他、日本の製造磁器と清国製造磁器、特に景德鎮との比較を行い、清国磁器の前途にも言及した。

この書における景德鎮製磁用具の記録を、以下のように抽出した。「工場組織及び製作法」には「轆轤、調和瓶、棒、筆、四角なる框、竹篋、糸、金属線 小鐵刃、薄刃庖丁、竹の篋、鐵の曲り、鋏、板掛様のもの 棧板、棚、絹篩、素焼きの鉢、匣鉢」がある。「彩書法附絵具」には「紙」がある。「荷作及び運搬」には「竹籠様のもの」がある。

藤江永孝と同じように、黒田も轆轤に注目し、次のように記録する。「轆轤は手轆轤にして其構造に於ては吾邦のものと大差なし、然れども、其圓板非常に大にして直径三尺五位より四尺内外あり心棒の長さ甚だ長く五尺許もあらんか 此轆轤は直径一寸許の竹の廻し棒を両手に取り全力を廻轉せしむる時は直径大なるを以て遠心力の爲め 長時間廻轉す」(黒田 1901:494)。

資料番号 6、7 には、景德鎮に関するものがない。

資料番号 8、9 の報告者は、明治 40 (1907) 年に農商務省在清国海外実業練習生であった石黒秀久である。資料番号 9 は、景德鎮を中心とした報告書である。その内容は、第 1 章「景德鎮の地形及び経過の土地」、第 2 章「経過の土地」、第 3 章「景德鎮に於ける製陶業」からなる。第 3 章の第 3 節の「做瓮又ハ磁工」部分には「轆轤」についての説明がある。「轆轤ハ我美濃ノ物より三倍大なり」(石黒 1907:216) とある。

資料番号 10 の調査者は、農商務省技師であった北村弥一郎である。明治 40 (1907) 年 1 月から 5 月にかけて、清国窯業を視察した。この報告書は、中国全土の陶磁器産業を視察し、詳しく報告したものである。景德鎮磁器生産工程および技術は、第 4 章「景德鎮陶業」で、景德鎮の位置、原料、坯土調和、造坯、釉下着画、釉薬、窯、匣鉢、焼成、釉上着畫、職工及び休業、産額ト商賈及び運搬、御窯廠の 14 節に分けて報告されている。

製磁用具の記録を、以下のように抽出した。

第 3 節「原料」の第 2 項「採掘」には「鐵槌」がある。第 3 項「粉碎及び陶汰」には「水車、杵白、杵、馬毛の篩、漉込、沈澱桶、柄杓、板棚」がある。

第4節「坯土調和」の第1項「調和及び淘汰」には「解桶、金網製の籃、攪拌鋏、漏水鉢、漉込甕、古通鉢、無底箱、鉄製の小鋤、陶車」がある。

第5節「造坯」の第1項「陶車の構造及び使用法」には「陶車、扱陶車、竹製の編條、古匣鉢、竹製ノ腰掛、廻棒」がある。第2項「陶車製作」には「廣げ篋、銅線、長板、轆轤、鋼鉄片、木製の浅キ桶、竹籬」がある。

第7節「釉薬」の第1項「白色釉薬」には「足踏式石製杵臼」がある。第2項「着色釉薬」には「乳鉢」がある。第3項「施釉」には「柄杓、刷毛、筆、竹筒、布片、霧吹器」がある。

第8節「窯」には「本焼窯、柴窯、磚」がある。第9節「匣鉢」の第2項「種類及寸法」には「飯碗用凹匣鉢、小型匣鉢、中型匣鉢、大器匣鉢」がある。第3項「製造」には「木製圓板、木製ノ細杆、絲、編條、編絲、定規、銅線、布ノ筒形袋、楔、布」がある。

第11節「釉上着画」の第1項「顔料」には「製磁乳鉢、細播、木製台」がある。第2項「着画法」には「転写紙、護膜印判、畫筆、布、竹筒」がある。第3項「着畫爐ノ形状及び構造」には「釉上着畫爐、鉄線」がある。

第13節「産額ト商賈及び運搬」の第5項「荷造」には「竹籬、木桶、竹籠、篋」がある。

報告書の中には、71枚の図像がある。生産用具と関係がある図像は図18から図40までの23枚である。23枚の図像資料に、2枚の写真がある。

資料番号10の景德鎮製磁用具についての記録は、表1の報告書の中では、最も詳しいものである。以上の記録の検討から、次のことがいえる。

- ① 技術専門者の藤江永孝、黒田政憲、北村弥一郎は「水車、杵臼」を中心とする粉碎および淘汰の用具を重視した。
- ② 3人とも「陶車」を中心とする成型用具に注目し、その大きさ、構造、棒の使用について特筆した。

黒田政憲、北村弥一郎は、筆の使い方にも注目し、黒田は「着畫に用ゆる筆は吾國の筆より長く且筆帽を筆軸の尾に被せ筆尾をして重からしむ 之れ着畫に便なるもの」（黒田1901：493）と、北村は「彩色ヲ用ユルノ外ハ其全部ヲ筆画トシ筆画ノ方法ニ就テハ本邦ニ於ケルト異ナルヲ見ズ、画筆ノ如キモ相類似セリ只使用ノ際書筆ノ軸端ヲ重クスル時ハ其据リヲ能シク畫キ良シトテ、筆鞘ヲ反対ノ一端ニ挿セルモノ多シ而シテ」（北村1908：43）と述べている。

2人がなぜ、筆の使い方に注目したのかについては、不明である。今後の課題とする。

最後に、日本における景德鎮製磁用具記録の特徴を、以下のようにまとめた。

- ① 翻訳書の場合：景德鎮の製磁用具の名称をそのまま引用し、注で説明するものが多い。説明は簡略的で、訳者の経験や想像による内容となっている。
- ② 調査報告の場合：日本と比較しながら、景德鎮の独特技術に関する製磁用具を説明するものが多い。
- ③ 製磁用具を調査対象とする意識が、強くみられる。
- ④ 製磁用具のサイズ、素材、用途などについて具体的に説明するケースが多い。

IV 欧米における景德鎮製磁用具の記録について

(1) 欧米における景德鎮製磁用具に関する書物の訳書について

ヨーロッパ諸国は16世紀から、景德鎮の製磁技術に憧れをもっていた。景德鎮の製磁技術を習得しようと、中国の製磁技術に関する書物を翻訳した。現在、残っている資料を表5のようにまとめた。

表5 欧米における訳本

資料番号	年代	訳本の資料名	原本	著者、訳者 および出版者	図像	その他
1	1856	『Histoire et fabrication de la porcelaine chinoise』	『景德鎮陶録』	Stanislas Julien フランス	あり 14点	
2	1910	『Description of Chinese Pottery and Porcelain: Being a Translation of the T'ao Shuo』	『陶説』	Bushell Stephen イギリス	陶磁器の実物の写真がある。	付録として『中国陶磁見聞録』が添付された。
3	1951	『Ching-te-chent'ao-luor The Potteries of China』	『陶録』	Geoffrey R. Sayer イギリス		
4	1959	『T'ao Ya or Pottery Refinements』	『匋雅』	Geoffrey R. Sayer イギリス		

資料番号1の訳者 Stanislas Julien はフランスの有名な東洋学者である。中国の書物を、数多く翻訳している。この本の序言によると『景德鎮陶録』を訳す目的は、当時のフランスの官窯（The Imperial Porcelain Manufactory at Sèvres）の職人たちに、技術のハンドブックを提供することである（2016：6）という。そのような目的であったため、訳者は『景德鎮陶録』の中の、技術的要素だけに注目した。訳本といっても、『景德鎮陶録』の全てを訳したわけではない。訳者は他の資料も利用し、『Histoire et fabrication de la porcelaine chinoise』（中国製磁歴史および技術）という題名を付けた。

資料番号1の付録には、専門用語リストがある。このリストの中の、製磁用具と直接関係がある単語は「竹糸刷紋」の一つだけである。

資料番号2の訳者は、イギリスの有名な東洋学者、Bushell Stephen である。1868～99年、北京のイギリス代表団付きの医官であった。中国の陶磁器に詳しい人物である。資料番号3と資料番号4の訳者は、Geoffrey R. Sayer である。中国陶磁器の鑑賞に役立てるために『陶録』『匋雅』を訳した（盧2016：6）。製磁用具に関する内容は、原本に基づいた内容が多い。

(2) 欧米における景德鎮製磁用具に関する調査報告について

欧米の関係者は、直接景德鎮へ行き、当時の景德鎮の様子や作陶方法などを詳細に報告している。表6はその調査記録をまとめたものである

資料番号1、2の著者、ダントルコールは、景德鎮で20年間の伝教生活を送っている。1712年と1722年に景德鎮の磁器製作方法を、フランス本国へ長編の書簡にして送付した。1712年の手紙は『中国陶磁見聞録』と呼ばれ、1722年のものは『中国陶磁見聞録補遺』と呼ばれる。18世紀初めにおける景德鎮の磁器製作法の基礎資料として、よく知られている。製磁用具の記録は技術関係の第2章、第3章、第4章に集中している。第2章「胎土、釉料および成形」の12「白不子の製法」には

表6 欧米における報告書

資料番号	年代	資料名	著者	画像資料
1	1712	『中国陶磁見聞録』	ダントルコール 小林太市郎 訳注	なし
2	1721	『中国陶磁見聞録補遺』	ダントルコール 小林太市郎 訳注	なし
3	1920	「The World's Ancient Porcelain Center」	Frank B. Lentz アメリカ	17枚

「鉄槌、乳鉢、楨桿、大缸、鉄のシャベル、型、箱、粗布」がある。17「坏土の調製と成形」には「缸、目の粗き籠、石盤、篋、轆轤、型、刀」があり、18「円器の製法」には「拉坏机、鑿刀、型物」がある。20「割型による成形」には「瓷鉢」がある。第3章「彩絵、色料および施釉」の23「色彩、殊に紅色と青料とについて」には「内底の無釉なる瓷制大乳鉢、(瓷) 鉢」がある。24「礬紅の製法」には「坩鍋」があり、30「金彩」には「瓷鉢」がある。

ダントルコールの手紙に記載された、製磁用具についての記録は、主に名称である。具体的な説明や、使い方の記述は少ない。だが、外国人の目からみた、その時代の景德鎮製磁用具の記録資料として、研究価値がある。

資料番号3「The World's Ancient Porcelain Center」はアメリカ人 Frank B. Lentz が書いた紀行文である。1920年11月にアメリカの著名な紀行誌『National Geographics』に掲載された。その時代の、景德鎮の磁器生産状況を記録した17枚の写真も載っている。直接、生産工程に関する写真は、15枚である。胎土を作る、船で土を運搬する、轆轤で成型、乾燥、釉をかける、絵を描く、穴を作る、販売などの工程が記録されている。職人が画面の中心となっているが、製磁用具も写されている。

これら欧米の資料の特徴を、以下の3点にまとめた。

- ① 日本の記録資料は、初めに訳本が出され、その後に調査報告が出ている。一方、ヨーロッパでは、ダントルコールの手紙にみられるように、調査報告の性質をもつものが、先に出されている。
- ② 製磁用具の内容は、ほとんど技術の記録に基づいて記録された、製磁用具の名称である。ヨーロッパにおける訳本は4冊だけである。日本よりその数は少ない。訳本の中の製磁用具の記録は、ほぼ原本に基づいて記録されている。
- ③ アメリカの写真資料は、その時代の景德鎮製磁用具を記録する最初の写真資料として、高い研究価値をもっている。

まとめ

本論文は、景德鎮伝統製磁業技術に関する記録資料を収集し、分類、整理したものである。その資料の中の用具の名称を抽出し、中国、日本、欧米における景德鎮伝統製磁用具の記録資料の内容を確認した。また、基礎資料としての、景德鎮伝統製磁用具の記録資料の状況と特徴も明らかにした。

以上、製磁用具に関する記録の検討から、以下のようなことが明らかになった。

- ① 製磁用具について最も古く、体系的に景德鎮製磁用具を記録した文字資料は、中国の書物では

ない。フランスのダントルコールが記した『中国陶磁見聞録』である。その資料は、景德鎮製磁の技術の記録である。ただし用具に関しては、その名称だけが記録され、製磁用具そのものには重点がおかれていない。

- ② 日本の調査者は、製磁用具を調査対象にするという意識をもっていった。製磁用具そのものに重点をおき、製磁用具のサイズ、使用法を記録した。残された製磁用具の記録は、詳細で研究価値が高い。
- ③ 『陶冶図』の影響を受けた中国の磁器生産工程図が、海外の博物館に残っている。日本において、そのような生産工程図があるかは不明である。もし存在するならば、製磁用具を描いた非文字資料として、重要な研究資料となるであろう。
- ④ 今後の研究課題として、抽出された製磁用具記録の利用方法や、現在残されている道具を含めた、景德鎮伝統製磁用具の変遷を明確にすることが挙げられる。

注

- (1) 日本では、三上次男、小山富士夫、塩田力蔵をはじめ、多くの中国陶磁器研究者が、景德鎮の生産技術への関心を示している。景德鎮磁器の生産技術の研究の際には、景德鎮の窯用具にも注目が集まった。

馮先銘、葉喆民、呉仁敬、辛安潮、中国科学院上海硅酸塩研究所、方李莉らは、膨大な考古学の資料から、景德鎮の陶磁器生産技術を中国陶磁史の重要な一部として扱っている。中国全体の陶磁器歴史の視点から、景德鎮陶磁器生産の歴史、技術と代表的遺物、伝世品を紹介し、研究している。窯用具をはじめ、生産用具の名称がしばしば出てくる。

劉新園（1982、1985）は景德鎮考古学の先駆者と呼ばれ、景德鎮市考古所の所長でもあった。①元芒口の磁器と覆焼工芸、②景德鎮湖田窯各期の典型的な碗類の造形特徴、およびその成因、③景德鎮における、明の成化官窯の遺跡と遺物、などの問題を論じ、窯用具も研究した。

江建新（2013）は、30年間の景德鎮の考古学の成果をまとめ、景德鎮窯業の遺跡の概要を述べた。その上で、景德鎮の考古学的考察と研究成果を先行研究としてまとめた。また調査報告の資料に基づき、宋、元、明、清の時代の著名な遺跡と遺物に注目した。元青花、釉上彩磁、成化斗彩天字盖罐、芙蓉手、新安沈没船の磁器、黒釉磁、彷彿官窯磁器、陶成紀事碑記など、世界的に注目されている課題について意見を述べている。さらに窯用具にも言及している。

荻嵐（2001）は7～14世紀に出土した日本陶磁器の遺物に関する考古学先行研究に基づき、中日文化交流史の視点から、その製品の流通様相を研究した。景德鎮窯生産技術および窯用具の内容にも、言及している。熊海堂（1992）は、東アジアにおける窯用具の分類と分布を研究した。発展史と技術交流史の視点から、中国と日本を中心とした東アジアの磚瓦窯技術の交流歴史を分析し、比較した。それに加え、景德鎮の製磁技術とトチン、焼台、匣鉢、火照など窯用具および窯詰技術の発展の研究を行っている。

ここでは、代表的な研究成果のみを挙げた。この他に、関係する内容を含むものもあるが、多岐にわたるため省略する。

- (2) 北京故宮博物館が判断した時代である。
- (3) 『天工開物』の刊本についての研究は、三枝博音、藪内清、潘吉星の訳本と著書を参照のこと。
- (4) 『天工開物』の焼き物生産工程図像資料は、清の宮廷にも影響を与えた。それについて余（2013：191）は三つの点から考証した。①康熙朝のダントルコールの手紙の中で言及された、②雍正朝に編纂された『古今圖書集成』が、それを記録した、③乾隆皇帝が書いた〈詠宣窯霽紅瓶〉という御製詩で「天工開物」に言及されている。
- (5) 銹は釉の誤りである。

- (6) 同上
- (7) 李國楨、宋伯胤、余佩瑾などの研究者が、その問題について意見を述べている。
- (8) 詳しい分析は、拙稿景德鎮製磁用具の記録資料としての『『陶冶図』について』『民具マンスリー』52(5)で行った。
- (9) 中国の福建省にある地名である。
- (10) 松村敏監修 (2002) 『農商務省商工局臨時報告』3 ゆまに書房 pp.107-133
- (11) 松村敏監修 (2002) 『農商務省商工局臨時報告』3 ゆまに書房 pp.134-143
加藤助三郎 (1900) 『大日本窯業協會雑誌』8 (93) pp.314-323
- (12) 松村敏監修 (2002) 『農商務省商工局臨時報告』3 ゆまに書房 pp.134-143
加藤助三郎 (1900) 『大日本窯業協會雑誌』8 (95) pp.389-394
- (13) 加藤助三郎 (1900) 『大日本窯業協會雑誌』8 (89) pp.153-162
- (14) 松村敏監修 (2002) 『農商務省商工局臨時報告』7 ゆまに書房 pp.481-506
- (15) 松村敏監修 (2003) 『農商務省商工彙報』3 ゆまに書房 pp.183-194
- (16) 松村敏監修 (2003) 『農商務省商工彙報』3 ゆまに書房 pp.183-194
- (17) 石黒秀久 (1906) 『大日本窯業協會雑誌』14 (166) pp.745-752
- (18) 松村敏監修 (2003) 『農商務省商工彙報』第4巻 ゆまに書房 pp.211-225
- (19) 北村弥一郎 (1908) 『清国窯業調査報告書』農江商務省
- (20) 淘汰と同じ意味をもつ。
- (21) ダントルコールはフランス語で書いたが、ここでは和訳本を利用する。

参考文献

日本語の文献 (五十音順)

- 加藤助三郎 1900 「清國陶磁器産地視察報告」『大日本窯業協會雑誌』8 (93) : 314-323
- 加藤助三郎 1900 「清國陶業視察追加報告」『大日本窯業協會雑誌』8 (95) : 389-394
- 加計三千代 2008 『『天工開物』著述の動機について』『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』26 (1) : 169-190
- 許之衡、塩田力蔵 1941 『説瓷新註——支那陶磁』第一書房
- 黒田政憲 1901 「清國窯業視察復命書」『大日本窯業協會雑誌』10 (112) : 131-137
- 黒田政憲 1902 「清國窯業視察復命書」『大日本窯業協會雑誌』10 (114) : 209a-217
- 黒田政憲 1912 「清國視察談」『大日本窯業協會雑誌』20 (236) : 293-311
- ダントルコール著、小林太市郎訳 1943 『支那陶磁見聞録』第一書房
- 宋応星、江田益英 1771 『天工開物』3 河内屋茂八 柏原屋佐兵衛山崎金兵衛
- 宋応星、潘吉星 藪内清 2016 『天工開物 = 天工開物』外文出版社
- 宋応星、三枝博音 1943 『天工開物』十一組出版部
- 宋応星、藪内清 1969 『天工開物』東洋文庫 平凡社
- 宋応星、藪内清 2004 『天工開物』ワイド版東洋文庫、平凡社
- 佐川正敏 2010 「中国における造瓦技術の変遷——「粘土紐巻き作り」から「粘土板巻き作り」への転換を中心に」『奈良文化財研究所研究報告』3 : 77-95
- 佐久間重男 1999 『景德鎮窯業史研究』第一書房
- 塩田力蔵 1938 「日本陶工伝」『陶器講座』雄山閣
- 塩田力蔵 1927 『陶磁工藝の研究』アルス
- 塩田力蔵 2007 『東洋絵具考 Vol.167』アジア学叢書大空社

- 塩田力蔵、朱炎 1944『對譯新註支那陶説』アルス
- 島田文雄 2013「陶磁描画だみ技法から考察した日本・中国——有田、景德鎮、醴陵の陶磁技法と交流史研究」東京芸術大学美術学部工芸科陶芸研究室
- 朱炎、三浦竹泉 1903『陶説 和漢對照』開益堂書店
- 朱炎、楊井勇三 1933『陶説』大連 楊井勇三
- 藍浦、愛宕松男 1987『景德鎮陶録 Vol.1』東洋文庫 平凡社
- 藍浦、鄭廷桂、永竹威、片山一 1980『景德鎮陶録』五月書房
- 日比野新七 1906「清國陶磁器業視察報告」『大日本窯業協會雜誌』15 (170) : 42-53
- 日比野新七 1906「清國陶磁器業視察報告 (続)」『大日本窯業協會雜誌』15 (171) : 79-84
- 藤江永孝 1900「清國景德鎮磁器視察報告」『大日本窯業協會雜誌』8 (92) : 274-283
- 藤江永孝 1900「清國景德鎮磁器視察報告 (承前)」『大日本窯業協會雜誌』8 (93) : 305-314
- 藤江永孝 1901「陶磁器業調査報告」『大日本窯業協會雜誌』9 (107) : 369-373
- 藤江永孝 1901「陶磁器業調査報告 (承前)」『大日本窯業協會雜誌』9 (108) : 423a-428
- 藤江永孝 1900「清國景德鎮磁器視察報告」「清國陶磁器産地視察報告」「明治33年第2冊農商務省商工局臨時報告」農商務省商工局編 農商務省商工局
- 三上次男 1969「陶磁の道——東西文明の接点をたずね」岩波新書 岩波書店
- 三枝博音 1973「技術の歴史」『三枝博音著作集』中央公論社
- 三枝博音 1954『道具と人類の発展』岩波書店
- 町田吉隆 1993「磚瓦の生産に関する一考察」『研究紀要』31 : 15-20
- 宮木慧子 2006『日本における陶磁器用ワラ包装の造形的特質』九州大学
- 藪内清、吉田光邦 1970『明清時代の科学技術史』京都大学人文科学研究所
- 原野農芸博物館 1975「『天工開物』と日本民具 民具がつなぐ日本と中国」9

中国語の文献 (ピンイン順)

- 陳寧 2017『清代陶瓷文献学论纲』中国轻工业出版社
- 方李莉 2013『中国陶瓷史』齐鲁书社
- 江建新 2013『景德鎮陶瓷考古研究』科学出版社
- 江滢河 2008「清代广州外销画中的瓷器烧造图研究——以瑞典隆德大学图书馆收藏为例」『故宫博物院院刊』2008 (3) : 99-109
- 盧軍羽 2011「中国主要陶瓷典籍在西方的译介研究」『广东外语外贸大学学报』(6) : 5-11
- 盧軍羽 2016「中国科技典籍文本特点及外国译者的翻译策略研究」『北京第二外国语学院学报』81-91
- 李艶、宮崎清 2010「景德鎮地域における伝統的磁器手づくり工房の様態——景德鎮の伝統的磁器産業の中核としての手づくり工房の諸相」『デザイン学研究』56 (5) : 37-46
- 李家治 1998『中国科学技术史 (陶瓷卷)』科学出版社
- 李其江、呉軍明、張茂林、呉隽 2012「『陶冶图説』制瓷技术理论化的特点及价值」『陶瓷学报』33 (1) : 104-107
- 李艶、宮崎清、植田憲 2009「景德鎮の伝統的製磁工房における生産方式に関する研究・調査」『日本デザイン学会研究発表大会概要集』56 : 186-187
- 劉新園、白焜、時岡二郎 1982「景德鎮湖田窯考察紀要」『東洋陶磁』12 : 101-116
- 劉新園、高喜美 1985「永樂前期官窯の白磁研究 : 永樂・宣徳官窯考証 その一」『東洋陶磁』15 : 153-180
- 潘吉星 1989『天工開物校注及研究』巴蜀書社
- 宋応星 1930『天工開物3卷』華通書局
- 宋応星、潘吉星 2004『天工開物 中國古籍大觀』台灣古籍出版
- 王麗 2016「『陶説』在日本的传播与影响」『景德鎮陶瓷』2016 (4) : 9-10

- 熊海堂 1992『東アジアにおける窯業技術の発展史と技術交流史の研究』名古屋大学
- 謝明良 2013『陶瓷手記：陶瓷史思索和操作的轨迹』上海古籍出版社
- 余佩瑾 2010「清乾隆《陶冶圖冊》の繪製背景與創作意圖」『故宫文物月刊』326：14-23
- 余佩瑾 2013「《陶冶圖冊》所見乾隆皇帝的理想官窯」『故宫學術季刊』30（3）：186-220
- 趙宏 1999「清唐英『陶冶圖說』中的工藝觀」『景德鎮陶瓷』1999（4）：39-43
- 周媛 2011「論『陶冶圖』與『陶冶圖說』的研究價值陶瓷研究」『陶瓷研究』29（4）：108-109
- 宗時珍 2018「對乾隆『陶冶圖』圖像與史料價值的思考」『南方文物』2018（02）：237-247

英語の文献

- Frank B. Lentz 1920 「The World's Ancient Porcelain Center」『The National Geographic magazine』：391-406